令和４年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報　第４号（７月予報）

発表日：令和４年６月29日　　岩手県病害虫防除所

１　情報の要点

（１）水稲

ア．**いもち病の発生は平年並の予報**ですが、気象条件により急激にまん延するので、今後の情報に注意し、圃場の観察と早期防除を最重点に万全の対策をとりましょう。

イ．**斑点米カメムシ類（第１世代）の発生は平年並の予報**ですが、カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道等では、イネ科植物が出穂しないような管理を徹底しましょう。また、本田内雑草も発生源となるので、本田内の除草も徹底しましょう。

（２）りんご

ア．**黒星病の発生がやや多の予報**です。園地内を見回り、発病葉や発病果は速やかに処分しましょう。

イ．**リンゴハダニの発生が多、ナミハダニの発生がやや多の予報**です。夏期は急増しやすいので、防除適期を逃さないようにしましょう。

ウ．**果樹カメムシ類の発生がやや多の予報**です。園地への飛来状況に注意し、大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を実施しましょう。

（３）野菜・花き

ア．**きゅうりでは、べと病や褐斑病、炭疽病の発生がやや多の予報**です。予防散布の徹底に加え、疑わしい病斑が見られたら摘葉し、まん延防止に努めましょう。

イ．**ねぎでは、ネギアザミウマの発生がやや多の予報**です。散布ムラが生じないように畝の両側から茎葉散布を行い、密度低下を図りましょう。

２　農薬の安全・適正使用

（１）岩手県では、６月１日から８月 31 日までを農薬危害防止運動月間と定め、農薬の使用や販売に関する正しい知識の普及・啓発をはじめとする各種の取り組みを実施しています。

（２）農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。特に、養蜂活動が行われている地域で水稲、大豆、りんご等の作物に一斉に農薬を散布する場合は、養蜂家に散布時期を周知するなど、ミツバチの危害防止に努めましょう。

☆農薬危害防止運動実施中（6/1～8/31）☆

【利用上の注意】

本資料は、令和４年６月 22 日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。

・農薬使用の際は（１）**使用基準の遵守**（２）**飛散防止**（３）**防除実績の記帳** を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】ＴＥＬ 0197(68)4427　ＦＡＸ 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html

３　３か月予報（７月～９月、仙台管区気象台、６月 21 日発表）

向こう３か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

７月　平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
８月　天気は数日の周期で変わるでしょう。
９月　天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

月別の平均気温・降水量

	平均気温 07月	平均気温 08月	平均気温 09月
東北地方	低20 並40 高40% **平年並か高い**見込み	低20 並40 高40% **平年並か高い**見込み	低20 並40 高40% **平年並か高い**見込み
数値は予想される出現確率（%）です			

		降水量 07月	降水量 08月	降水量 09月
東北	日本海側	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み
	太平洋側	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み	少30 並40 多30% **ほぼ平年並**の見込み
数値は予想される出現確率（%）です				

図は気象庁ウェブサイト（https://www.jma.go.jp/jma/index.html）より引用

水稲病害

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
いもち病 (葉いもち)	－	並	（1）BLASTAMによる判定では、６月20日以降に県内の一部の地域で、感染好適条件が出現したが、全県では出現していない。(±) （2）取置き苗の放置は全県では減少傾向にあるが、本年も取置き苗での発病が確認されている。(±) （3）平年並に葉いもち予防粒剤が広く使用されている。(±) （4）水稲の葉色値（６月23日現在、各農業改良普及センター調べ）は平年並である。(±) （5）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
紋枯病	－	並	（1）前年の発生量は平年よりやや多かった。(＋) （2）水稲の生育量（６月23日現在、各農業改良普及センター調べ）は平年を下回っている。(－) （3）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
稲こうじ病	－	並	（1）前年の発生量は平年並であった。(±) （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2　防除のポイント

○いもち病は、気象条件により急激にまん延するので、今後の情報に注意し、圃場の観察と早期防除を最重点に万全の対策をとりましょう。

【いもち病】

（1）発病した取置き苗や本田持ち込み等の伝染源のある圃場とその周辺では、病勢の進展が速く、ずりこみ等の大きな被害につながることが多いので、地域で特に注意する。

（2）葉いもち防除

①　予防粒剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）を使用した場合

予防粒剤を使用した場合でも、圃場を観察し、本田で発病している場合は直ちに茎葉散布を行う。水面・投げ込み施用剤の処理が遅れた場合は特に注意する。

②　予防粒剤を使用しなかった場合

圃場をよく観察し、発生を確認したら直ちに茎葉散布を行う。

（3）穂いもち防除

穂いもち予防粒剤の施用にあたっては、生育状況を観察し、防除時期を失しないように注意する。なお、葉いもちの発生が見られるところでは、粒剤施用前に茎葉散布剤で防除を行う。

【紋枯病】

（1）茎葉散布の場合：穂ばらみ末期（７月末～８月上旬）の発病株率が、早生種15%、晩生種20%以上の場合は防除を行う。

（2）粒剤施用の場合（前年多発圃場）：防除適期　出穂25～15日前　モンカット粒剤
出穂20～10日前　モンガリット粒剤（稲こうじ病にも効果有）

※いもち病防除剤との混合剤を使用する場合は、剤によって散布適期幅が異なるので注意する。

【稲こうじ病】

（1）前年多発した圃場を中心に防除する。特に、穂ばらみ期に雨天が続くと多発するので注意する。

（2）銅剤およびトライフロアブルの効果が高い。

【ばか苗病】

（1）圃場を観察し、発生を確認した場合は、株ごと抜き取って焼却または土中に埋めるなどして処理する。

水稲虫害

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）	第１世代やや早	第１世代並	（1）有効積算温度から算出されるアカスジカスミカメ第１世代成虫の羽化盛期はやや早い予測。 （2）７月の気温は平年並か高い予報。 （3）６月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。（－） （4）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）
コバネイナゴ	－	やや多	（1）６月中旬のすくい取り調査では、発生圃場率は平年並であった。（±） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）
フタオビコヤガ（イネアオムシ）	－	第２世代並（平年少発生）	（1）６月中旬のすくい取り調査では、第１世代幼虫の発生圃場率は平年より低かった。（－） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件である。（＋）

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2　防除のポイント

【斑点米カメムシ類】

（1）カメムシ類の増殖を防ぐため、畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道などで**イネ科植物（イタリアンライグラス、スズメノカタビラ等）が出穂しないような管理**を徹底する。また、水稲の出穂15～10日前までに畦畔や水田周辺の雑草などを地域一斉に刈り取る。

（2）**本田内にヒエ類、イヌホタルイ、シズイ等が発生**している圃場では、これらの雑草がカメムシ類の発生源となり、薬剤防除の効果が十分に得られないので、本田内の除草を徹底する。

（3）なお、斑点米カメムシ類の発生状況等については、今後発表する情報を参考とすること。

【コバネイナゴ】

（1）一般には防除は不要であるが、幼虫が多発している場合には、７月中旬頃までに畦畔と畦畔際２～３ｍの水田に薬剤を散布する。

（2）移動性が高いため、個々で防除すると他の圃場へ移入する場合があるので、地域で一斉に防除する。

【フタオビコヤガ（イネアオムシ）】

（1）一般には防除は不要である。

3　防除上の留意事項

（1）養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。

りんご病害

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
斑点落葉病	－	並	（1）６月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや低かった。（－） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件である。（＋）
褐斑病	早	並	（1）基準圃場での初発生は例年よりも早かった。 （2）前年収穫期の発生園地率は平年並で、伝染源密度は平年並と考えられる。（±） （3）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）
黒星病	－	やや多	（1）６月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや高かった。（＋） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2　防除のポイント

【共通事項】

（1）薬剤がかかりやすいように不要な徒長枝を剪除するなど枝葉が過繁茂にならないようにする。
（2）散布ムラが生じないように十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。
（3）耐性菌の発達を防ぐため、落花期散布以降は黒星病を対象としたＥＢＩ剤及びＳＤＨＩ剤の使用を避ける。

【斑点落葉病】

（1）７月は本病が急増しやすい時期である。高温（25～30℃）、多湿を好み、感染から発病までの潜伏期間は短く、夏期のまん延は極めて急性である。天候に注意し、防除のタイミングを逃さず、予防散布に努める。
（2）本病は樹上部の枝の混み合った部位からまん延することが多い。特に夏期に発生する徒長枝は病原菌密度を高め、散布薬剤の到達を妨げる。
（3）多発が心配される園地ではイミノクタジン剤、ポリオキシン混合剤、ロブドー水和剤など本病に効果の高い剤を用いる。なお、ポリオキシン混合剤やロブドー水和剤は耐性菌を生じやすいので注意する。

【褐斑病】

（1）前年多発園では、発生の有無にかかわらず、７月中旬にトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を特別散布する。なお、前回までにラビライト水和剤を使用した場合は、耐性菌回避のため、ユニックス顆粒水和剤 47 を使用する。
（2）スピードスプレーヤの旋回場所や片側散布の場所などの散布むらが多発要因となる。
（3）早期発見のためには、主幹部近くの枝の込み合っている部位の果そう葉や新梢下位葉を観察する。園地の中でも薬液のかかりにくい場所を中心にできるだけ多くの樹で観察する。
（4）葉に褐色の病斑が観察された場合や黄変葉が坪状に観察された場合は、これらの葉やその周辺の葉を観察し、本病の特徴である分生子層（黒色虫糞状の粒々）の有無を確認する（図１参照）。

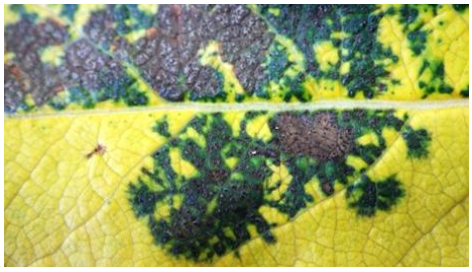

図１　褐斑病の病斑

【輪紋病】

（1）７月は輪紋病の果実感染が多くなる時期である。特に夏期が高温多雨で経過すると多発が懸念されるので、散布間隔が空かないよう注意する。

（2）枝への感染も６～７月に多く、若い枝ほど感染しやすいので、幼木や枝幹部への散布も丁寧に行う。

【炭疽病】

（1）散布間隔が空かないように注意し、輪紋病などと同時防除する。

（2）炭疽病の発病果は、二次伝染防止のため見つけ次第取り除き、埋没させるなどの処分を徹底する。

【黒星病】

（1）園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉（図２～４）や発病果（図５）を摘み取り、土中に埋めるなど適正に処分する。

（2）苗木など未結果樹での発生にも注意し、成木と同様に薬剤防除を徹底する。

（3）他病害との同時防除を兼ねて、本病に効果のある予防剤を定期的に散布する。

図２　果そう葉の葉裏病斑

図３　葉表の初期病斑

図４　隆起した葉表の病斑

図５　幼果の病斑

りんご虫害

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
リンゴハダニ	－	多	（1）６月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。（＋） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。（＋）
ナミハダニ	－	やや多	（1）６月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並。（±） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。（＋）
キンモンホソガ	第２世代羽化盛期早	やや多	（1）有効積算温度から推測される第２世代の羽化盛期は、平年より早い。 （2）７月の気温は平年並か高い予報。 （3）６月前半の巡回調査での第１世代の発生園地率は、平年より高かった。（＋）
シンクイムシ類	－	並	（1）７月のモモシンクイガの被害果の発生は例年少ない。（±）
果樹カメムシ類	－	やや多	（1）６月後半の巡回調査での被害果発生園地率は平年より高かった。（＋）

記号の説明（++）：重要な多発要因、（＋）：多発要因、（±）：並発要因、（－）：少発要因、（－－）：重要な少発要

2　防除のポイント

【ハダニ類】

（1）ハダニ類の要防除水準は寄生葉率30%である。主幹近くの新梢葉（普通樹では主幹や主枝の徒長枝葉）に加え、目通りの新梢葉や樹上部の徒長枝葉も観察し、要防除水準に達した場合は直ちに防除を実施する。

（2）薬剤の効果を高めるため、殺ダニ剤の散布７日前頃までには下草処理をしておく。

（3）薬剤散布は樹上部までかかるよう十分量を丁寧におこなう。不要な徒長枝は散布ムラの原因となるので、早めに剪除し薬剤のかかりやすい樹形を維持する。

（4）薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は１シーズン１回使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを厳守する。

【キンモンホソガ】

（1）６月下旬～７月上旬に新梢葉を観察し、発生が目立つ園地では防除する。

表　アメダスデータによるキンモンホソガ第２世代羽化盛期の予測（6月28日現在）

地点名（標高）	羽化盛期	平年値
盛　岡　（155m）	７月第３半旬	８月第１半旬
北　上　（61m）	７月第３半旬	７月第５半旬

※ 羽化盛期は、当年の越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期（北上、盛岡：４月第５半旬）を起点とし算出した。（平成22年度防除技術情報）

※ ６月24日までは令和３年のアメダス現況値を、６月25日以降は平年値を利用した。

※ 平年値は、平成24年から令和３年までのフェロモントラップへの誘殺盛期の平均からみた羽化盛期。

※ 観測地点の標高より100m増すごとに羽化盛期は３～４日遅れるので注意する。

【シンクイムシ類】

（1） ７月は薬剤防除の重点時期であるので、散布間隔を空けないよう防除する。

（2）交信攪乱剤設置園においてフェロモントラップへの誘殺や被害果が確認された場合には、ただちに薬剤防除を実施する。特に放任園が近くにある場合は発生源になるので注意する。

（3）被害果は３日以上水漬けするなどの処理を徹底し、発生密度の低下に努める。

【果樹カメムシ類】

（1）カメムシ類の飛来は、園地周辺部の結果樹木（ヤマザクラ、キリ、クワ）や防風ネット等も同時に観察する。特に、例年被害の多い園地では、園地内をこまめに観察し、卵塊の有無にも注意する。

（2）６月中下旬まで越冬成虫の飛来が多い場合は、７月に新成虫の誘殺が多くなる可能性が高いので注意する。

（3）大量の飛来が確認された場合は、効果の高い有機リン剤や合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤などの薬剤により速やかに防除を行う。ただし、合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類の異常多発や薬剤抵抗性害虫の発現などが懸念されるので行わない。

図１　チャバネアオカメムシの成虫

図２　クサギカメムシ
（左：成虫、右：卵からふ化後の幼虫）

図３　カメムシ被害果（左：外観、右：切断面）

３　防除上の留意事項

（1）養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。

きゅうり

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
べと病	－	やや多	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。（＋） （2）現地では、本病害に対する抵抗性品種の導入が進められている。（－）
うどんこ病	－	やや少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。（－） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）
斑点細菌病	－	やや少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。（±） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に不適な条件である。（－）
黒星病	－	少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。（－） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に不適な条件である。（－）
褐斑病	－	やや多	（1）前年秋期の発生圃場率は、平年より高かった。（＋） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に好適な条件である。（＋）
炭疽病	－	やや多	（1）前年秋期の発生圃場率は、平年より高かった。（＋） （2）７月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に好適な条件である。（＋）
ワタアブラムシ	－	並	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。（－） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2　防除のポイント

【共通事項】

（1）７月前半はべと病、黒星病及び斑点細菌病、後半は炭疽病、褐斑病及びうどんこ病の予防散布を徹底する。なお、炭疽病、褐斑病のまん延を防ぐため、疑わしい病斑が見られたら摘葉を行い、速やかに薬剤散布を行う。

（2）７月中旬以降は、茎葉が繁茂してくるため、薬剤の散布ムラが生じやすいので、株全体の葉の裏表にムラなくかかるようにアーチの両側から散布する。

【べと病】

（1）下葉や古い葉に発生しやすいので、敷わら等を行い雨滴による病原菌の飛散を防ぐ。また、発病を確認してからでは被害が大きくなるので予防散布に努める。

【うどんこ病】

（1）葉裏や茎、側枝でまん延するので注意して観察し、発生が見られたら早期に防除を行う。特に、うどんこ病耐病性ではない品種においては注意する。

（2）耐病性品種でも、成り疲れ等で草勢が衰えると発病するので、効果のある薬剤で防除する。

【斑点細菌病】

（1）降雨が続くと発生が助長されるので、発生初期に防除を徹底する。

【黒星病】

（1）低温・多雨条件で発生が多く、生育初期に発生すると被害が大きいため、７月前半までの防除を重点的に行う。

（2）発生後の散布では防除効果が現れにくいので予防散布に努める。

（3）発病しやすい生長点や若い葉、幼果に薬液がかかるように丁寧に散布する。

【褐斑病、炭疽病】

（1）両病害とも、発生を確認してからでは防除が困難なので、予防散布に努める。

（2）初期の発病葉を摘葉後、両病害に効果の高いダコニール１０００もしくはゲッター水和剤を散布する。

【モザイク病、ワタアブラムシ】

（1）モザイク症状が激しい株は、早期に抜き取る。

（2）ワタアブラムシの防除については、定植時に粒剤を施用していても効果が切れる頃なので、引き続き防除を行う。

３　防除上の留意事項

（1）薬剤選択にあたっては、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、同一系統の薬剤を連用せずに、異系統の薬剤をローテーションで使用する。

キ ャ ベ ツ

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
コ　ナ　ガ	－	並	（1）６月の巡回調査では、産卵は確認されず、幼虫発生圃場率は平年より低かった。(－) （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
モンシロチョウ	－	やや多	（1）６月の巡回調査では、幼虫発生圃場率は平年並だった（±） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2　防除のポイント

【コナガ】

（1）７月以降もコナガの発生は断続的に見られるため、定植時に薬剤処理をする。

（2）定植時に薬剤処理を実施した場合でも、圃場をよく観察し、発生状況に応じて防除を実施する。

（3）薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。

①コナガは飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガが本県に広く発生している可能性がある。このため、ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。

②コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は１作型１回にとどめ、年間使用回数の削減に努める。

【ヨトウガ、ウワバ類、モンシロチョウ】

（1）ヨトウガやウワバ類の幼虫は、成長するとともに食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガ防除の際にヨトウガ、ウワバ類にも効果のある薬剤を選択する。

（2）７月以降はモンシロチョウの発生は断続的に見られ、寄生密度も高くなる。成長した幼虫は食害量が多くなるので、若齢幼虫の発生が目立つ場合は、コナガと同時防除を行う。

ね　　ぎ

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
さび病	－	やや少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。（－） （2）７月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）
べと病	－	やや少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。（－） （2）７月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）
黒斑病・葉枯病	－	やや少	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。（－） （2）７月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。（±）
ネギコガ	－	やや多	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並だった。（±） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）
ネギハモグリバエ	－	並	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害度ともに平年より低かった。（－） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）
ネギアザミウマ	－	やや多	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かったが、被害度は平年よりやや低かった。（±） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）

記号の説明　(++)：重要な多発要因、(＋)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

（1）圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める。
（2）茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
（3）発生源となる被害残渣や雑草等を圃場から持ち出して処分する。
（4）ＱｏＩ剤は、耐性菌の発生リスクが高いので年２回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。

【べと病】

（1）降雨が続くと発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
（2）べと病の病斑には葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）が二次的に感染するため、予防散布に努める。

【さび病、黒斑病、葉枯病】

（1）降雨が続くとこれらの病害の発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
（2）肥料切れすると発病しやすいので、適切な肥培管理に努める。
（3）葉枯病（褐色斑点病斑）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（Ｒ２－２病害虫防除技術情報参照）。

【ネギコガ】
（1）有効積算温度から推定される第３世代の防除適期は、県中南部で平年並の７月第２半旬である。

【ネギハモグリバエ】
（1）圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う（図１）。

【ネギアザミウマ】
（1）圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める（図２）。
（2）高温条件下では世代の経過が早いため（25℃では 16～17 日程度で１世代経過）、散布間隔が空かないよう注意する。
（3）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。

図1　ネギハモグリバエによる食害痕

図2　ネギアザミウマによる被害

りんどう

1　予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予　報　の　根　拠
葉枯病	－	並	（1）６月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。（－） （2）7月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。（±）
褐斑病	－	並	（1）前年の発生量は、平年並であった。（±） （2）7月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。（±）
ハダニ類	－	並	（1）６月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。（－） （2）７月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。（＋）

記号の説明　(++)：重要な多発要因、（＋）：多発要因、（±）：並発要因、（－）：少発要因、（－－）：重要な少発要因

2　防除のポイント

〇褐斑病の重点防除時期は６月下旬から７月下旬です。効果の高い薬剤で予防散布を徹底しましょう。

【共通事項】

（1）７月は、葉枯病、褐斑病の重点防除時期にあたるので、散布間隔が開かないようにする。

（2）収穫が終了した品種は病害虫の発生源となるので、収穫前品種とあわせて防除を継続する。

【褐斑病】

（1）発病後の薬剤防除が困難なので、予防散布を徹底する。前年発生が見られた圃場では、本年も発生するので、一次感染が起こる６月下旬から７月まで、効果の高い薬剤で防除を実施する。

（2）株仕立てが不十分であったり、風通しが悪い圃場では発生が多くなるので、適正な茎数に管理する。

（3）下位葉や畝の内部など薬剤が到達しにくい場所や、畝の北側の日当たりの悪い場所などで発生が多く見られることから、薬液が株全体に十分かかるように散布する。

（4）被害の拡大と翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

【葉枯病】

（1）降雨後の散布は効果が劣るので、週間天気予報を参考にして、降雨日前の散布を心掛ける。

（2）薬剤散布にあたっては、下葉や畦の内部にもよくかかるように散布する。

（3）弱小茎やこぼれ種から生じた茎葉は伝染源となるので抜き取り、土中に埋めるなどして処分する。

【炭疽病】

（1）被害茎葉は、取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

（2）ニセアカシアは本病の伝染源になるため、圃場周辺にある場合は特に防除を徹底する。

【ハダニ類】

（1）多発してからでは防除が困難となるので、前年多発圃場や常発圃場では葉裏を観察し、発生初期に防除する。なお、散布時は葉裏に薬液が十分かかるようにする。

（2）体色が赤色のカンザワハダニと半透明のナミハダニが寄生するが、後者は特に見落としやすいので注意して観察する。
（3）薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
（4）雑草はハダニ類の発生源となるので除草し、圃場外へ運び出す。

【リンドウホソハマキ】
（1）被害が多い圃場では、今後も防除を継続する。
（2）被害茎は見つけ次第折り取り処分する（図１～３）。

図１　被害茎

図２　被害茎の着色と羽化孔

図３　被害花蕾の着色

【アザミウマ類】
（1）りんどうの開花とともに成虫が飛来し増殖するので、蕾の着色が見られたら薬剤防除を行う。
（2）収穫が終了した品種が発生源となるので、収穫後の残花や不要な茎葉を折り取り、圃場外に持ち出す。
（3）周辺の開花した雑草はアザミウマ類の増殖源となるので除草し、圃場外へ運び出す。